〔原 著〕

援助行動の意思決定における情報探索過程の分析¹⁾

松 井 豊

東京都立立川短期大学

Analysis of information search process in decision making of helping behavior

YUTAKA MATSUI (*Tachikawa College of Tokyo*)

A computer assisted experiment was conducted to analyze the information search process in decision making at helping behavior. Sixty-five female students were shown eight helping situations and information lists on personal computer display. They were asked to retrieve informations on display by pressing a key in order to make decision as to whether to help or not.

An analysis of the retrieval order of informations suggested that these situations were classified into three groups · · daily life help, emergency help, and charity-donation · · , in which similar cognitive and affective process exists.

Key words: decision making, helping behavior, altruism, social cognition, computer assisted experiment.

問 題

本研究は、援助行動における意思決定過程を分析するために、援助の意思決定時の情報検索過程を検討することを目的とする。

援助行動は1960年代後半以降、社会心理学や発達心理学の分野においてさまざまな角度から研究されてきたが、扱われる要因が多様化し、得られた研究知見の体系化が困難であるという問題が生じ始めていた。

こうした問題をふまえて近年、援助状況を類型化する研究や、援助行動を行なう際に生じる意思決定過程をモデル化する研究が、相次いで発表されている(松井, 1989)。

援助状況の類型化アプローチ

援助状況を類型化する研究は、多数の援助状況を被験者に提示して、それらの類似度を判断させたり、それぞ

れの状況における援助経験を尋ねてその回答を多変量解析し、類型化を行なっているものが多い。

例えば、高木(1982)は、援助行動を①寄付奉仕②分与行動③緊急事態における援助行動④努力を必要とする援助行動⑤迷子や遺失者に対する援助行動⑥社会的弱者に対する援助行動⑦小さな親切行動の7種に分類し、それらが①社会的規範の指示②個人的規範の指示③援助出費(コスト)の3次元構造の中に位置づけられることを明らかにしている。

また、Smithson, Amato, & Pearce (1983) は、62種の援助エピソードを①緊急事態への介入②形式ばった組織的な援助③見知らぬ人に対する形式ばらない、きまぐれな、ありふれた援助④寄付・分与に分類した。松井(1981)は20種の援助場面における経験を解析しているが、その結果は援助状況が①援助経験の一般的傾向②募金的援助傾向③自発的援助傾向の3つの軸によって分類

1) 本論文の一部は、日本心理学会第52回大会と日本社会心理学会第29回大会において発表されております(松井, 1988a; 1988b)。本論文の作成にあたり、加藤義明先生(東京都立大学)、高木修先生(関西大学)、竹村和久先生(光華女子短期大学)のご指導やご協力を戴きました。記して感謝致します。本研究で使用したコンピュータープログラムは、山本真理子先生(筑波大学)の下で汎用型に改訂されています。入手を希望される方は、著者までご連絡下さい。

されることを明らかにした。この解析に入力されなかった緊急時の援助を考慮に入れば、援助状況は①日常的援助②寄付・分与（募金）③ボランティア活動（自発的援助）④緊急的援助に分類されることを示唆しており、Smithson らの研究と整合している。

援助の意思決定モデル化アプローチ

一方、意思決定過程をモデル化する研究の多くは、援助行動を実行するに至る意思決定の内的過程をいくつかの下位過程に分け、それらの段階の順序を図示する形で、モデルや理論を構築している。例えば、Bar-Tal (1976) は、援助状況を緊急事態と非緊急事態に分け、前者においては生理的覚醒や状況の名前づけが起こると整理している。また、Schwartz らは一連の研究において (Schwartz, & Howard, 1984 など)、窮状への注意、有効な行動への注意、援助能力への注意、動機づけ、予期的評価を経て行動に至るモデルを提唱している。このモデルでは、予期的評価において非援助行動をとるような評価が下された後に、非援助を正当化するような防衛段階が生じることも理論化されている。

こうしたモデルは、従来混乱しがちであった研究成果を整理し体系化する助けになると期待される (松井, 1985, 1989)。しかし、これらの研究の多くは、意思決定の下位過程の内容や順序性を思弁的に推測するにとどまり、それらの過程の詳細を実証する研究は少ない。意思決定の下位過程の順序性を実証した研究も、その多くはパス解析などを用いて調査データを分析するアプローチを用いている。

松井 (1985) は、こうした要因間の統計的因果性にもとづいて、順序性を検証するアプローチを「因果的順序性」と命名し、時間を追った事象の変化を分析する「時間的順序性」のアプローチと区別している。因果的順序性とは測定された変数間の関係を、因果分析やパス解析などによって整理するアプローチを指す (例えば、Meyer, & Mulherin, 1980)。一方、時間的順序性とは意思決定時に生じる行動などを、時間の順序に従って測定してゆく研究法を意味する。この用法に従えば、従来の援助の意思決定過程を扱った研究の多くは、因果的順序性について分析を行っており、時間的順序性を検証した研究は少ない。

援助行動の時間的順序性を検証した研究は、竹村と高木によって進められている。彼らは一連の研究 (竹村・高木, 1987a, 1987b など) において、マイクロ・コンピュータのディスプレイを用いた情報モニタリング法を開発し、献血や臓器の提供行動における情報探索過程を分析している。実験の結果、提供行動における情報探索過程は、

過程の前期と後期とで異なり、前期は援助コストを基本にして選択肢を絞り込み、後期は少数の選択肢について、個人的義務感や要請者の被害の軽減性などに関する情報を探索する事が明らかにされた。この研究は、援助行動の意思決定の時間的順序を、巧みな手法で解明した画期的な研究であるが、選択される情報の内容が明示されておらず、状況が限定されているなどの限界も有している。

彼らの手法をもとに、多数の援助状況における具体的な情報の探索過程を分析すれば、援助行動の意思決定過程の内容が明らかになると共に、意思決定過程に対応した援助状況の分類が行えるものと期待される。

本研究の目的

以上の問題意識に基づき、本研究は援助行動の意思決定過程を取り上げ、その時間的順序性を明らかにすることを第1の目的として、情報探索過程の分析を行なう。さらに、この分析を通して援助状況の分類を行なうことを、第2の目的とする。なお、意思決定モデルを構成する参考のために、情報探索過程と併せて、意思決定中の感情についても分析を行なう。

上記の目的のために、本研究では竹村・高木のマイクロ・コンピュータを用いた情報モニタリング法を改変して、複数の援助状況における情報探索過程を分析する。

予備調査

本研究では情報モニタリング法を使用するが、この手法では検索される情報の内容が実験の結果に大きな影響を与えるものと予想される。そこで本実験に先立って、情報の側面と内容を決定するための予備調査が行なわれた。この調査では情報の側面と内容について、以下の3条件が設定された。

第1の条件は現実性である。本研究では被験者に対して、マイクロ・コンピュータに提示された援助場面を想定させ、その場面において意思決定するために必要な情報を検索させる研究法が使用される。想定場面では現実場面と遊離しない状況や刺激の設定が重要と考えられる。そこで、検索される情報も日常生活で出会う内容と一致する、現実性のある内容であることが必要と考えられた。

第2の条件は網羅性である。本研究では被験者に提示される情報の側面が予め決定されている。このため、被験者が意思決定に必要と考える情報の側面が、提示される情報リストから欠落する危険性を持つ。こうした危険性を避けるために、提示される情報が意思決定に必要な情報の側面を網羅していることが、必要と考えられた。

第3の条件は中庸性である。本研究では意思決定における情報検索の時間的順序性を検証することが主な目的となるが、検索された情報の内容が極端な内容を持つ場

合（例えば「援助すると相手に殺されます」といった内容）には、情報検索は即時に終了してしまい、情報間の順序性を検証することが困難になる。このため、検索される情報は単独では行動を決定してしまうほど極端な内容でないこと、中庸であることが必要と考えられた。

以上の条件を満たす情報の側面と情報の内容を決定するために、2つの予備調査が実施された。

第1予備調査では、網羅性の条件を満たすために必要な、情報の種類を確定する事を目的として、自由回答形式による質問紙調査が実施された。質問紙は、Table 1 に示す9種の援助状況を回答者に想定させ、援助か非援助かの「行動選択肢のどちらかを選ぶとしたら、どんな情報が必要だと思われますか」と尋ねる形式であった。援助状況は、高木（1982）やSmithson et al.（1983）を参照して選定された。被験者は都内の公立短大と公立大学の学生37名で、1987年6月初旬に、個別配布個別回収式で実施された。回答は著者を含む心理学者3人によって、KJ法（川喜田、1966）を用いて整理された。

第2予備調査では、現実性と中庸性の条件を満たす情報内容を決定するために、質問紙調査が実施された。Table 1 の状況のうち、「献血」状況と重複の多い「募金」を除く8つの状況を選び、調査を行なった。調査では第1予備調査の結果にもとづいて、各状況について2～4種の情報の種類を取り上げ、内容の現実性を考慮して2

～4の情報内容を設定した。質問紙では、これらの選択肢が単独で提示されたときに、援助か非援助かの決定が下せるか否かを尋ねた。被験者は都内の私立女子短期大学の学生90名で、1987年6月中旬に集合調査形式で実施された。この調査の結果、「この情報だけでは援助か非援助か決定できない」という回答の多い選択肢を、情報内容が極端ではない情報とみなし、本実験に使用することとした²⁾。

方 法

実験材料

①実験前調査票：援助に関わる規範意識や情動的共感性（松井、1987b）を測定する質問票。②マイクロコンピュータ：日本電気(株)製 PC9800VM 2 本体にカラーディスプレイ PC-KD854 を接続して使用した。③プログラム：練習試行課題と8種の本試行課題から構成されており、本試行課題は8種の初期画面と5～7種の副画面から構成されている。初期画面では画面が3つに分割され（Fig. 1）、援助場面の説明文・行動選択肢・情報リストが表示される。場面の説明文には、Table 1 に示す8種の場面が1場面づつ表示される。行動選択肢には、援助行動と非援助行動の2種の行動が表示される。情報リストには、5～8種の情報の側面の名称が一覧表示され

Table 1 用いられた援助場面の概略

番号	場 面 の 概 要	高木の分類	Smithson らの分類
1	バスで前に乗った女性が小銭がなくて困っている	分与	寄付・奉仕
2	昼道端で若い女の人が男に殴られている	緊急事態	緊急事態
3	日曜日、隣が引越しをしているが、人手が足りなさそうである	努力を要する援助	不明
4	大学の教室で学生証の忘れ物を見つけた	迷子や遺失者への援助	日常的援助
5	道で前を歩いている人が書類を落としてしまった	社会的弱者への援助	日常的援助
6	駅の自動販売機の前で切符の買い方が分からなくて、お婆さんが困っている	小さな親切	日常的援助
7	旅先で見知らぬ男からカメラのシャッターを押して欲しいと頼まれた	小さな親切	日常的援助
8	夕方帰宅途中、駅前で献血のよびかけをしていた	寄付・奉仕	寄付・奉仕
9	駅前で、ボーイスカウトが赤い羽根の募金を呼びかけている	寄付・奉仕	寄付・奉仕

注：第1予備調査で使用された援助場面の内容と、高木（1982）とSmithson et al.（1983）の分類。第2予備調査と本実験では場面9（募金）を使用していない。

- 2) 「隣の引っ越しを手伝う」状況における「隣人との関係」の情報側面を例にとりて、具体的な調査手法を示す。この側面に関しては「よく遊びにいくようなつきあい」「毎日挨拶するようなつきあい」「あまりつきあいはありません」の3項目が用意され、各項目についてそれらの情報によって行動が決定できるか否かを、「援助する」「援助しない」「決められない」の3件法で尋ねている。調査の結果、「決められない」の回答が最も多い「毎日挨拶をするようなつきあい」を本実験に使用することにした。

<p>場面1</p> <p>昼間、運賃前払いのバスに乗ろうとしたら、前に乗った見知らぬ女性が1000円札しかなくて入口のところで両替できず困っていました。バス代は160円です。</p>	
<p>行動</p> <p>f・1 両替する</p> <p>f・2 そのまま乗る</p>	<p>情報</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 女性の外見 2. 女性がどの程度困っているか。 3. 女性は人に助けを求めているか。 4. 運転手の対応 5. 他の乗客はどうしているか。 6. 自分（あなた）が持っている小銭。
<p>ピーという音がしたら 情報調べを始めてください。</p>	

Fig. 1 本実験の初期画面の例

注：実際の画面においては、「行動」の部分は緑色、「情報リスト」の部分は黄色、他は白色で表示されている。この画面が表示されて43秒すると、ブザーが鳴り、左下の「ピーという音がしたら…」という表示が消え、情報検索が行えるようになる。情報リストの番号キーを押すと、情報の内容を示す副画面が表示される。副画面が表示されて5秒たつと、この画面が再び表示される。

ている (Table 2)。また、被験者が情報リストを検討せずに検索を始めることが無いように、初期画面が提示されてから47秒間は、どのキーを押しても入力されないように設定されている。初期画面提示後47秒たつとブザーが鳴り、キーが押せることを被験者に知らせる。被験者が情報リストに示された番号のキーを押すと、各情報の内容を説明する副画面に切り替わる。副画面にはそれぞれの情報の内容を説明する文章が提示されている。例えば、「バスで小銭がなくて困っている女性」の場面 (場面1) では、初期画面において「運転手の対応」という情報のキーを押すと、副画面に切り替わり「両替できませんと断りました」という文章が提示される。副画面が提示されてから5秒たつと、再び初期画面が提示される。試行中に行動選択肢のキー (ファンクションキー) を押すと、1試行が終了する。④試行後質問票：意思決定中に生じると考えられる感情や意識を測定するために、再認形式で感情などを尋ねる質問票。再認感情の質問は、斉藤 (1985) や松井 (1987a; 1987b) などを参考にして作成された18項目である (Table 3)。質問は、呈示された場面が「本当の場面であれば、どんな気分や感じをもつか」を2件法で尋ねる形式である。

被験者 被験者は公立短期大学的女子学生65名 (18歳～21歳)。

手続き 実験前調査票は大学の心理学講義中に集団実施され、その回答者のうち参加志願した者を、本実験の被験者とした。本実験は大学の心理学実験室において個

別に実施された。実験は実験者からの主旨説明の後、コンピュータのディスプレイに表示された教示に従って実施された。被験者はまず、練習課題に答えて反応の仕方を学習し、本試行に移った。

本試行ではディスプレイに表示された各場面の説明文を読み、必要な情報を調べて、2種の行動のどちらかを選択するように教示された。教示においては、決定の早さは実験に何の関係もないこと、ふだん判断しているように決定して欲しいこと、初期画面が提示されてから47秒間はキーを押しても入力されないで情報リストの内容をすべて読むこと、情報リストの内容を番号順に調べるといった調べ方を避けること、情報は繰り返し調べてもよいし全く調べなくてもよいことなどが強調された。被験者が行動を選択して1試行が終わるたびに、試行後質問票が実施された。

本試行は8場面について行なわれ、実施には約25分を要した。実施は1987年7月上旬である。

結 果

結果の分析に先立って、本実験の被験者の愛他性に関する性質に関する分析が行なわれ、続いて選択された行動別の情報の検索回数や検索順序が分析された。最後に想定された感情が分析された。

被験者の愛他性について

実験前調査は被調査者全員に対して、強制的に回答を

Table 2 各場面の選択肢の内容と検索率（単位％）

場面1 バスで小銭のない女性		場面2 道で女性が殴られている	
1. 女性の外見	14	1. 女性は自分の知り合いか	37
2. 女性がどの程度困っているか	31	2. 男性の外見・様子	63
3. 女性は人に助けを求めているか	54	3. 女性の外見・様子	58
4. 運転手の対応	62	4. 男性の殴り方	54
5. 他の乗客はどうしているか	14	5. 自分は急いでいるか	28
6. 自分が持っている小銭	78	6. 人通りの量	43
		7. 近くに交番はあるか	68
場面3 引越しの手伝い		場面4 学生証の落し物	
1. よその家の人は手伝っているか	31	1. 落とした人が取りに来そうか	45
2. その日の天気予報	15	2. 持ち主はどんな人か	34
3. 隣の家とのつきあい	86	3. 学生証入れの中に他に何か入っているか	35
4. 隣の家の人の人柄	55	4. 自分に急ぎの用があるか	52
5. 自分の予定	86	5. 届け出の事務手続きは面倒か	40
6. 引越して運ぶ荷物は多そうか	37	6. 教室には他に誰もいないか	34
7. 隣の家に気づかれずに家をでられるか	17		
場面5 道で書類が散乱		場面6 切符を買えないお婆さん	
1. 落とした人はどんな人か	12	1. お婆さんの外見	11
2. 落とした書類の量	54	2. お婆さんの態度・様子	68
3. 自分は急いでいるか	51	3. 後の人の対応	34
4. まわりの人の対応	28	4. 自分は急いでいるか	55
5. 自分とその人との距離	49	5. 他の自動販売機の様子	29
6. その人はどうしているか	54	6. 駅員は近くにいるか	20
場面7 カメラのシャッター押し		場面8 献血	
1. 男の人の様子・外見	49	1. 自分のその日の予定	65
2. 自分は急いでいるか	58	2. 不足している血液の本数	35
3. カメラの操作は難しそうか	43	3. 呼びかけている男性の様子	22
4. 男の人の態度	66	4. 献血にかかる時間	32
5. まわりに人はいるか	42	5. 献血をして、もらえそうな物	11
		6. 他の人の対応	34

注：数値は各選択肢を検索した被験者が全被験者（65人）に占める割合を百分率で示したもの。

求める形式で実施されたが、本実験の被験者は自発的参加の形で募集された。このため、本実験の被験者は愛他性の面で偏っている可能性がある。そこで、実験前調査の被調査者のうちで被験者にならなかった者（非被験者、28名）と被験者について、援助の規範意識と情動的共感性を算出し、平均値の差の検定を行なった（Table 4 参照）。その結果、全ての尺度において有意な差はみられなかった。

選択された行動別の検索回数

各試行において、選択された行動の内容別に被験者を2群に分けて検索回数を算出し、平均値の差の検定を行

なった。各群の平均検索回数と検定結果は Table 5 に示す。

Table 5 から分かるように、有意水準5%で有意な差がみられたのは4つの場面であった。場面1（バスの小銭）と8（献血）は非援助群より援助群の検索回数が多く、場面3（引越しの手伝い）と6（切符の買い方）は非援助群の回数の方が多い。場面4（忘れ物）も有意水準10%で、非援助群の検索回数が多い傾向がみられた。

検索順序の分析

各情報選択肢が検索された比率を Table 2 に示す。各情報がどのような順序で検索されたかを明らかにするた

め、3種類の分析が行なわれた³⁾。

第1の分析は前半と後半の検索回数についての分析である。各場面において2回以上検索を行なった被験者について、検索回数を2分して前半と後半に分け、各情報選択肢の検索が前半と後半のどちらに入るかがカウント

Table 3 各場面で再認された想定感情 (単位%)

場面番号	1	2	3	4	5	6	7	8
1 怒り	2	<u>26</u>	0	0	3	5	0	2
2 イライラする	5	3	2	6	3	<u>34</u>	11	2
3 気の毒	<u>37</u>	<u>48</u>	<u>25</u>	<u>25</u>	<u>49</u>	<u>46</u>	6	<u>32</u>
5 くやしい	0	2	0	2	0	2	0	0
6 驚いた	0	<u>55</u>	2	2	8	2	17	0
7 びっくりした	3	<u>60</u>	0	3	14	0	9	0
10 恐ろしい	0	<u>63</u>	0	0	0	0	2	9
11 悲しい	0	2	0	0	0	3	0	3
12 苦しい	0	5	3	5	0	2	0	5
13 淋しい	0	2	0	0	3	0	0	2
14 嬉しい	1	0	5	2	2	8	0	5
15 不安である	5	<u>31</u>	8	<u>20</u>	2	8	18	14
16 恥しい	17	3	8	2	3	2	11	9
17 誇らしい	14	0	6	2	6	3	0	6
18 かわいそう	<u>20</u>	<u>71</u>	5	12	<u>40</u>	<u>37</u>	3	14

注：数値は、各場面でそれぞれの感情が想定されると回答した被験者が、全被験者(65人)に占める割合を百分率で示したものの。下線は20%以上の肯定率を示したことを意味する。

された。この際、検索回数が奇数の場合には、中央順位を選択肢が集計から除外された。こうして算出された前半と後半の検索数を、2回以上の検索を行った被験者全員について、情報選択肢ごとに集計した。

この集計法では、前半の総検索回数と後半の総検索回数は同一になる。そこで各選択肢について、前半と後半の検索回数が同一(50%ずつ)であるという帰無仮説のもとに、分布の適合度の検定が行なわれた。この検定結果が有意であれば、その選択肢は前半か後半のどちらかに有意に多く検索されていることを意味する。この検定の結果、5%水準で前半か後半に有意に多く検索された選択肢を Table 6 に示す。

Table 5 選択された行動別にみた検索回数

場面	援助群			非援助群			t 値
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	
1	54	2.70	1.41	11	1.64	1.61	2.91*
2	54	3.67	1.88	11	3.00	1.86	1.41
3	49	2.96	1.41	16	4.31	1.90	3.45**
4	38	2.08	1.91	27	3.00	1.96	1.88+
6	51	1.92	1.40	14	3.14	1.60	3.34**
7	24	2.33	1.82	41	2.85	1.16	1.27
8	29	2.48	1.52	36	1.58	1.77	6.15**

注：+p<.10, *p<.05, **p<.01(以下同)。

場面5は非援助群が3人しかいなかったため、検定を行っていない。

Table 4 被験者群と非被験者群の援助に関する規範意識得点、情動的共感性得点の比較

	非被験者			被験者			分散の比の検定	平均値の差の検定	
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD		t	df
感情の被影響性	27	17.37	4.30	65	17.95	5.61	1.71	0.48	90
感情の暖かさ	28	21.82	3.87	62	22.50	4.55	1.38	0.69	88
援助的責任の規範	28	21.54	5.62	63	22.39	4.18	1.81	0.81	89
恩互惠の規範	28	25.11	3.32	64	25.08	4.11	1.54	0.03	90
非関与の規範	27	19.22	3.70	64	18.44	4.42	1.43	0.81	89

注) 分散の比、平均値の差の全ての検定値は5%水準で有意ではなかった。

- 3) 検索順序に関してはこれらの分析の他にも、順序相関の算出や反応時間との分析などが考えられうる。しかし、個々の試行における検索回数が異なるため、順序相関は算出できない。また、本プログラムでは、副画面提示後初期画面に戻るまでに5秒間をおくように設定されているため、反応時間の分布に歪みがみられた。このため、反応時間の分析は行なえなかった。なお、検索された情報の関連性についても分析を行なったが、明確な結果が得られず複雑になるため、掲載を略した。

第2の分析は、各選択肢が最初に検索された比率についての分析である。検索を全く行なわなかった者を除く被験者について、何人がどの選択肢を何番目に検索したかが集計された。各選択肢について、最初に検索された比率（当該の選択肢が最初に検索された数／その選択肢が検索された総数）を算出し、他の全ての選択肢が最初に選択された比率（他の全ての選択肢が最初に選択された数／他の選択肢が検索された総数）と比較して、比率の差の検定が行なわれた。比率の差の検定の結果、最初に選択された比率が5%水準で有意に多い選択肢を、Table 7に示す。

第3の分析は、各選択肢が最後に検索された比率についての分析である。第2の分析と同様に、各選択肢が行動選択を行なう直前（検索の最後）に検索された比率が算出され、他の全ての選択肢が最後に選択された比率と比較して、比率の差の検定が行なわれた。この検定の結果、有意に多く最後に選択された選択肢を Table 8 に示す。

以上の分析の結果、有意な検定結果が得られた情報選

Table 6 前後半の検定の結果、有意差がみられた情報選択肢

場面	選択肢の概略	前半	後半	χ^2 値
1	3. 援助要請者の様子	18	8	3.85*
1	5. 周囲の人の様子	1	7	4.50*
1	6. 持っている小銭	9	28	20.06**
2	1. 援助要請者は知り合いか	16	4	7.26**
3	1. 周囲の人の様子	5	14	4.26*
3	2. その日の天気予報	1	9	6.40*
3	3. 援助要請者とのつきあい	38	12	13.52**
3	5. 自分の予定	32	17	4.59*
3	7. 隣に気づかれずに出られるか	0	11	7.33**
5	4. 周囲の人の対応	2	11	6.23*
6	2. 援助要請者の様子	20	7	6.26*
6	5. 他の自動販売機の様子	4	12	4.00*
7	5. 周囲に人はいるか	4	19	9.78**
8	1. 自分の予定	31	2	25.48**
8	4. かかる時間	5	14	4.26*
8	5. 報酬	0	6	6.00*
8	6. 周囲の人の対応	4	14	5.56*

注：各選択肢の前半と後半の被検索数と、検定の結果を示す。 χ^2 値の自由度は全て1で、件数にあわせてイエーツの補正を行なった（以下同じ）。

択肢について、場面ごとにその結果を述べる。なお、以下の記述では繁雑を避けるために援助を必要としている登場人物を、すべて「援助要請者」と表記している。

場面1（小銭の両替）：前半と後半に分けると、前半には「3. 援助要請者の様子」が多く検索され、後半には「5. 周囲の人の様子」と「6. 持っている小銭」が多く検索されている。最後に検索される情報としては「6. 持っている小銭」が多い。

場面2（殴打されている女性）：前半には「1. 援助要請者は知り合いか」が多く検索され、最初には「1. 援助要請者は知り合いか」と「4. 加害者の殴り方」が多く検索されている。最後には「7. 近くに交番はあるか」が多く検索されている。

場面3（引越しの手伝い）：最初に検索される情報は「3. 援助要請者とのつきあい」と「5. 自分の予定」が多く、前半と後半に分けても前半にはこれらの選択肢が多く検索されている。後半には「1. 周囲の人の様子」や「2. その日の天気予報」や「7. 隣に気づかれずに家を出られるか」が多く検索されている。

場面4（学生証の落し物）：いずれの分析でも有意な結果は得られていない。

場面5（書類の散乱）：前半と後半に分けると、後半に「5. 周囲の人の対応」が多く検索されており、最後に

Table 7 最初に有意に多く検索された情報選択肢

場面	選択肢の概略	χ^2 値
2	1. 援助要請者は知り合いか	9.36**
2	4. 加害者の殴り方	4.85**
3	3. 援助要請者とのつきあい	20.38**
3	5. 自分の予定	7.93**
6	2. 援助要請者の様子	17.57**
7	3. カメラの操作は難しいか	5.51*
8	1. 自分の予定	62.71**

Table 8 最後に有意に多く検索された情報

場面	選択肢の概略	χ^2 値
1	6. 持っている小銭	31.30**
2	7. 近くに交番はあるか	19.95**
5	6. 援助要請者の様子	8.09**
7	5. 周囲に人はいるか	6.32*

検索される情報としては「6. 援助要請者の様子」が多く検索されている。

場面6 (切符の買い方)：前半後半に分けると、前半には「2. 援助要請者の様子」が多く、最初に検索される情報もこの選択肢が多い。後半には「5. 他の自動販売機の様子」が多く検索されている。

場面7 (写真撮り)：最初に検索される情報としては「3. カメラの操作は難しそうか」が多い。後半には「5. まわりに人はいるか」が多く検索され、最後にもこの選択肢が多く検索されている。

場面8 (献血)：前半後半に分けると、前半には「1. 自分の予定」が多く、この選択肢は最初にも多く検索されている。後半には「4. かかる時間」や「5. 報酬 (献血をしてもらえそうな物)」や「6. 周囲の人の対応」が多い。

想定感情の分析

各試行の終了時に実施された質問票には、呈示された場面が「本当の場面」であれば、どんな「気分や感じ」を持つかを想定させ、それらの感情を再認形式で回答する形式の質問が含まれていた。この質問への回答を場面毎に集計した結果を、Table 3に示す。Table 3から分かるように、各場面で想定される感情は異なっているが、場面2 (殴打される女性) では「恐ろしい」「怒り」「驚いた」などの強い情動が高率で想定されており、場面7 (カメラのシャッター押し)を除く全ての場面では、「気の毒」という同情や共感を表わす感情が、高い想定率を示しているという特徴がみられた⁴⁾。

考 察

被験者の愛他性の分析結果は、本実験の被験者が被験者以外の人と共感性や規範意識の点で等質であることを確認した。選択された行動別の検索回数の分析や検索順序の分析は、援助状況によって情報検索過程が異なる事を明らかにした。

しかし、場面間の細かな相違を捨象して要約すれば、本研究で扱われた8つの場面は、検索回数や順序や想定された感情に基づいて、3つの状況類型にまとめることができると考えられる。

3種の状況類型

第1の状況類型は場面2 (殴打される女性) の緊急事

態の援助である。この場面では援助群非援助群共に、他の場面より情報の検索回数が多い。検索順をみると、事態への関与の責任性判断と関連する「援助要請者と知り合いか」や事態の理解を求める「加害者の殴り方」がまず検索され、最後に援助資源を意味する「交番の近さ」が検索されている。想定される感情は「怒り」「驚き」「動揺や恐れ」など、多様で強い情動があがっている。例えば20%以上の被験者が肯定した感情の数を見ると、(Table 3)、他の場面では0から3個であるのに比べ、この場面では7個と多くなっている。これは、緊急事態では生理的覚醒が生起するという、Bar-Tal (1976) の理論と合致している。

また、事態の理解を求める情報が検索されたことは、Bar-Tal の理論にある状況の名前づけの過程に対応しているものと解釈される。

しかし、Bar-Tal の理論とは異なり、緊急事態以外の状況を1つのカテゴリーにまとめることは難しい。本研究の結果からみると、場面8 (献血) には他の非緊急事態とは異なる特徴がみられる。この状況では、情報の検索回数が少なく、援助群より非援助群の回数が有意に少なくなっている。検索順をみると、援助資源にかかわる「自分の予定」が先に検索され、後半に「かかる時間」や「報酬」など援助コストや利得に関する情報が検索されている。想定される感情も20%以上のものが1個と、他の場面に比べて少ない。

Smithson *et al.* (1983) などはこの場面を「寄付・分与」状況と分類しているが、本研究の結果からも、この状況は他の非緊急状況とは異なる第2の状況類型と位置づけられる。

残りの6場面の多くは、(場面1を除いて)援助群より非援助群の情報検索回数が多く、検索順は「援助要請者は知り合いか」や「援助要請者の様子など」など、事態の理解や関与の責任性判断に関する情報が先に検索され、後半に「周囲の人の様子」や「持っている小銭」など、援助コストや援助資源や周囲の状況に関する情報が多く検索されている。またこれらの場面では、(場面7を除いて)同情や共感を表わす感情が多く想定されている。20%以上肯定された感情は0から3個と、上記の2類型の中間に位置している。このように、場面によって差はみられるが、これらの日常的な援助状況は全体として共通する点が多く、1つの類型として位置づけることが可能で

4) 実験にはTable 3に表記した項目以外に「安心した」と「満足した」「不満な」の3項目を用意したが、これらの項目への肯定率を選択された行動 (援助か非援助か) 別に比較したところ、多くの場面で差がみられた。これらの感情項目は意思決定中に生じたものではなく、意思決定後に生じたものと推定される。そのため、これらの項目の結果の掲載は割愛した。

あると考えられる⁵⁾。

これら3種の状況の検索過程の特徴はTable 9のように概括される。

以上の結果から、本研究で扱われた援助状況は「緊急事態」「寄付・募金」「日常的援助」の3種類に分類されると考察された。本研究では取り上げられなかった「自発的援助」を考慮に入れば、この結論は、援助状況を4つに分類したSmithson *et al.* (1983)の理論や松井(1981)の結果から示唆される内容と一致している。

また、高木(1982)の類型と対応させてみると、場面2は「緊急事態」状況であり、社会的規範の指示、個人的規範の指示、援助出費のいずれもが高い状況類型と位置づけられている。一方、場面8は「寄付・奉仕」場面であり、社会的規範の指示や個人的規範の指示が低く、援助出費の高い状況と位置づけられている。従って、本研究の結果と高木の理論を組み合わせ考察すれば、意思決定時の情報検索の過程や感情は、高木の理論における社会的規範の指示や個人的規範の指示によって規定されているものと推定される。

以上のように、本研究において示唆された状況類型は先行研究と整合していた。従って本研究は、援助の意思決定における情報検索過程や意思決定に関わる感情が、これらの理論で提唱された類型にそって系統的に異なることを、明らかにしたものと位置づけられよう。

2段階の情報検索過程

以上のように、検索される情報は状況によって異なるが、検索された情報の内容を検索の前半と後半に分けてみると、3種の状況に共通した傾向を読みとることができる(Table 9 参照)。いずれの状況でも、検索の前半には事態の意味を理解したり、要請者と関係や関与の責任性を判断するための情報が検索されている。一方、後半には、周囲の状況を探り、援助コストや資源や利得などに関わる情報が検索されている。

この結果は、援助の意思決定に関わる認知過程が事態の理解と関与の責任性を判断する第1段階と、コストや利得などの分析を行なう第2段階に分離されることを示唆している。

この援助行動の意思決定に関する2段階過程の存在を直接的に立証した研究はない。しかし、Schwartzのモデルにはこの2段階過程と対応する部分がみられる。Schwartzのモデルにおける窮状への注意と有効な行為への注意の過程は、本研究の第1段階に相当し、预期的評価の過程は第2段階に相当するとみることができる。また、多くの日常的援助状況で、非援助者が援助者に比べてより多くの情報を検索した事実は、Schwartzの理論にある防衛段階の存在と関連するものと考えられる⁶⁾。但し、本研究ではSchwartzが理論化したような細かな過程は分離されていない。

Table 9 3種の援助状況別にみた情報検索過程と想起感情の特徴

状 況	緊急事態の援助	寄付・募金の援助	日常的援助
場面の例 (本章の場面)	2. 殴打されている女性	8. 献血	4. 落し物を届ける 5. 書類を拾う
検索回数	援助群・非援助群共に多い	全般に少ないが、非援助群で特に少ない	(場面によるが)非援助群の方が多い
検索順序	事態の意味・重大性 要請者との関係 (関与の責任性) →援助資源	援助資源 (関与の責任性) →援助コスト・利得 ・周囲の状況	事態の意味・ 要請者との関係 (関与の責任性) →周囲の状況・資源
生起する感情	驚愕・怒り・動揺や 恐れ・同情や共感	同情や共感	(重大性の特に低い 状況を除いて) 同情や共感

5) 場面1(バスの小銭)は非援助群の方が援助群より検索回数が多いなど、第2の状況類型(寄付・募金)と共通した面がみられる。これは場面1で使用される資源(小銭)が寄付や募金と類似した内容であることと、関連する結果と考えられる。松井(1981)は援助経験の構造を分析して、第2軸に「見知らぬ人に金銭を寄付する」傾向を抽出しているが、この結果からみると、場面1は第3の状況類型と第2の状況類型の特徴を兼ね備えた状況であると推定される。

また、竹村・高木は臓器などの提供行動における情報探索過程を分析し、情報検索の前半には援助コストに関する情報が検索され、後半には個人的道徳感や被害の軽減性に関する情報が検索されることを明らかにしているが、本研究の結果は彼らの結果と一致していない。この結果の相違は2つの理由により生じているものと考えられる。第1は2つの研究で取り上げた援助状況の違いである。本研究では提供行動のような自発性の高い状況を扱っていない。状況の種類によって情報検索の過程が異なるという本研究の結果からみると、自発性の高い援助行動には本研究とは異なる情報検索過程が生じるものと予想される。第2の理由は情報の具体性の相違である。竹村・高木の研究では情報の内容が各属性の程度を表わす数値で表示されており、情報の内容が抽象的になっている。このために本研究とは異なる過程が生じたものと考えられる。

しかし、本研究は援助における情報検索過程を探索的に検討した研究であり、2段階過程の存在を明確に実証した研究ではない。また、従来の研究においても2段階の情報検索過程について明確に述べた研究はなく、この見解の妥当性や一般性についてはさらに検証を加える必要があろう。

本研究の問題と今後の課題

以上のように、本研究の結果は、援助行動における意思決定過程の内容や援助状況の分類について、新しい知見をもたらしている。しかし、本研究の被験者は限定されており、感情は想定法でしか測定されていないなどの問題を残している。今後は、本研究で開発された研究方法を拡張し、援助行動だけでなく対人行動一般に関する意思決定過程について検証を行う必要があろう。

引用文献

- Bar-Tal, D. 1976 *Prosocial behavior--Theory and research*. New York: John Wiley & Sons.
川喜田二郎 1966 発想法 中央公論社
松井 豊 1981 援助行動の構造分析 心理学研究, 52, 226-232.
松井 豊 1985 援助行動の生起に関する理論モデルの動向 東横学園女子短期大学紀要, 20, 104-115.

- 松井 豊 1987 a 援助の内的過程 中村陽吉・高木修(編) 「他人を助ける行動」の心理学 光生館 Pp. 101-117.
松井 豊 1987 b 援助行動の意思決定過程における意識の流れ(1) 日本心理学会第51回大会発表論文集, 666.
松井 豊 1988 a 援助行動の意思決定における情報探索過程の分析(1) 日本心理学会第52回大会発表論文集, Pp. 201.
松井 豊 1988 b 援助行動の意思決定における情報探索過程の分析(2) 日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 170-171.
松井 豊 1989 援助行動の意思決定過程に関する研究 東京都立大学博士論文
Meyer, J. R., & Mulherin, A. 1980 From attribution on to helping: Analysis of the mediating effects of affects and expectancy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 201-210.
斉藤 勇 1985 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, 56, 222-228.
Schwartz, S. H., & Howard, J. A. 1984 Internalized values as motivators of altruism. In E. Staub, D. Bar-Tal, J. Karylowski, & J. Reykowski (Eds.) *Development and maintenance of prosocial behavior*. New York: Plenum Press. pp. 229-255.
Smithson, M., Amato, P. R., & Pearce, P. R. 1983 *Dimensions of helping behavior*. Oxford: Pergamon Press.
高木 修 1982 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, 23, 137-156.
竹村和久・高木 修 1987 a 順社会的行動の意思決定過程における認知の変化 心理学研究, 58, 144-150.
竹村和久・高木 修 1987 b 意思決定過程における情報探索ストラテジーと内的状態: 提供行動の場合 実験社会心理学研究, 26, 105-114.

(1990年2月19日 受稿)
(1990年9月4日 受理)

- 6) 援助した者と援助しなかった者の検索回数の分析からみると、日常的援助状況では後半の情報を検索した者が非援助を決定しているが、寄付・募金的状況では前半の情報だけで非援助が決定されている。また、緊急事態では援助するにせよしないにせよ多くの情報が検索されている。日常的援助状況の結果が Schwartz のモデルにおける防衛段階の存在と関連するという考察が妥当であるとすれば、Schwartz のモデルは寄付・募金状況や緊急事態にはあてはまらないことを、本研究の結果は示唆している。